

人工的存在者の主体性と倫理

新川 拓哉 (Takuya Niikawa)

神戸大学

科学技術の発展に伴い、私たちはさまざまなものを創り出せるようになった。スマートフォン、人工心肺、遺伝子操作が加えられた新種の農作物、光に直接反応する脳をもったマウスなど、例は尽きない。最近では、情報科学や幹細胞生物学の飛躍的な進歩により、高性能な人工知能や試験管内で培養されるヒト脳オルガノイドなどが生み出されてきた。

これらの存在者をめぐる哲学的問題の一つに、「それらは主体なのか」というものがある。複雑なプログラムを組み込まれた高性能な掃除ロボットは主体なのだろうか。あるいは、試験管内で培養された脳オルガノイドは主体なのだろうか。そして、もし人工知能や脳オルガノイドが主体であるなら、彼らは倫理の対象になるのではないか。つまり、私たちはそれらを「モノ」ではなく道徳的地位をもつ主体とみなすべきなのではないか。

この発表では、主体性をめぐるさまざまな立場を検討し、人工主体という概念についての理解を深めたうえで、人工主体と倫理とのかかわりについて考察する。

具体的には、まず、意識主体と行為主体を概念的に区別したうえで、それぞれの意味で主体になるための条件について、内在主義的アプローチと関係主義的アプローチの観点から分析する。内在主義的アプローチとは、 X が主体であるための条件を、 X に内在する性質／能力の観点から特徴づけるものである。関係主義的アプローチとは、その条件を X と人間を中心とした他の主体との関係のあり方から特徴づけるものである。

次に、内在主義的に特徴づけられる主体性と、関係主義的に特徴づけられる主体性が、異なるタイプの道徳的地位と結びつく可能性について論じる。